
東方小説 もう1つの世界

CROW

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方小説 もう1つの世界

【Nコード】

N3279X

【作者名】

CROW

【あらすじ】

謎の研究所にいた。高校一年生の山崎一はある日幻想入りする。紅魔館で働くことになった彼の仕事はフランの相手をする事だった。

そして気に入られた彼は休みの日にレミリアに背き彼女を祭りへ連れ出した。

第1話（前書き）

「東方紅夜変」の平行ワールドです。

第1話

俺は山崎一高校一年生だ。ある日俺は謎の組織に連れ攫われ山奥の研究所で暮らしていた。生活はまあまあ快適だった。

俺はいつものように採血され脳を調べられたりしていた。

そして今日は所長室へ連れて行かれた。所長の名は西園寺爽さいおんじそうで28歳と若かった。しかし会ったことは無かったので初対面だった。

俺を連れて来た研究員の東昇ひがしのぼるがドアをノックした。

東「所長入ります」

部屋にはスーツを着た金髪の男性がいた。顔はジャニーズ系のイケメンだった。

西「君が山崎一か」

「そうです」

西「東、地下の部屋へ彼を連れて行ってくれ準備は整っている」

地下にはコンクリートで出来た広い部屋があった。体育館ぐらいはある。

そして近くには青いTシャツを着た少年と黒いジャージの上に白衣を着た

若い白人男性がいた。

そして壁から大きなディスプレイが出てきて所長の顔が映った。

西「二人は佐藤渉とジョン・ホワイトだ」

西「今から佐藤と戦って貰う」

そしてディスプレイは壁に入って行った。

東とジョンは別室に行き部屋の様子を映した映像を薄型テレビで見ていた。

佐藤「行くぞ」

そして彼が細い剣レイピアを何もないところから取り出し斬りつけてきた。頬を掠めて血が出た。こいつ本気で殺す気だ。

「出来るわけねえだろ」

佐藤「期待外れだな」

その時頭の中に言葉が浮かんた。それは「あらゆる能力を使う程度の能力」と「能力を使いこなす程度の能力」だった。

俺は半信半疑に自分の筋力、生命力を上げて三国志の呂布が使ったと言われる武器ほうてんがけき方天画戟を創り出した。

そして俺はそれを手に取り彼を攻撃した。

佐藤「一体何をした」

そして俺の攻撃を受け止めたが持っていた剣を飛ばされた。

「よく分からん」

佐藤「力も強い」

「行くぞ」

彼は新しい武器を創り出した。それは黒いオーラが出ていて危険な日本刀だった。

佐藤「これは俺の先祖代々伝わる妖刀「黒楼剣」だ」

「何か危なそうだな」

そして俺に斬りかかった受け止めたが真っ二つになってしまった。

俺はケルト神話に出て来る剣クラウ・ソラスを創ってみた。

能力のおかげで上手く創れた。理由はこの剣が不敗の剣だったからだ。

「これは行ける」

そして佐藤が斬って来た受け止めると黒楼剣の刃が真っ二つになった。

佐藤「嘘だろ」

その時再び壁からディスプレイが出てきて所長が映った。

西「そこまでだ」

その時俺の足元の空間が裂けた。中には目がいっぱいあった。

「これはスキマ」

俺は研究所へ連れて行かれる前にやっていたゲームのキャラ「八雲紫」の

スキマと似ていた。

そして俺はそのまま落ちて行っ

主人公設定

山崎一

種族 人間

年齢 16歳

能力 あらゆる能力を使う程度の能力
その名の通り様々な能力を使うことができる

能力を使いこなす程度の能力
能力を最初から使いこなせる

好きな物・事 カレー（中辛）、東方、パソコン、フランドール・スカーレット

嫌いな物・事 見下す人、馬鹿にする人

家族 父（故人）、母（故人）

説明 10年前の通り魔殺傷事件で父を失い母と二人で暮らしていたが1か月前に研究所に連れて行かれた。その後母はくも膜下出血で亡くなった。

第2話

気が付くと知らない部屋でベッドで寝ていた。

「知らない天井だ」

？「気が付きましたか」

近くには銀髪のメイドがいた。

「（さ、咲夜？）夢かな寝よう」

彼女は確か架空の人物のはずだったのでもう一回寝た。

咲「夢じゃありません」

「証拠は」

咲「こうですか」

彼女に頬をつねられた痛かったので信じることにした。

「何で俺はここで寝ている確かスキマに落ちた筈」

咲「門の前に倒れてました」

咲夜がいるという事は此処は紅魔館か。まさか本当にあったとは。

咲「お嬢様が「起きたら連れて来い」と言っていたので一緒に行きましょう」

そして気が付くと大きな両開きの扉があった。お嬢様ってレミリアか。

咲「お嬢様入ります」

そこには羽の生えた少女がいた。若干威圧感を感じて不快だったので霊夢の「空を飛ぶ程度有能力」で感じなくしておいた。

レ「貴方名前は」

「山崎」

レ「私はレミリア・スカーレットこの紅魔館の主で吸血鬼よ」

やっぱり本人かまだ信じられない。

「これからどうすれば」

レ「いきなりだけど妹の相手をしてあげて」

いきなりそんなことを言い出した。初対面の人にそれは無いだろう。

「え」

咲「彼は見た所外来人ですが」

レ「いいのよ」

「分かったよやるよ」

だつて俺の好きなキャラに会えるんだ。拒否権なさそうだし多分今の俺だと十分相手出来るだろうしな。

レ「彼女は危険よ」

「大丈夫だ能力あるみたいだし」

レ「咲夜彼をフランの部屋へ」

咲「は、はい」

そして気が付くと階段の前へいた。

咲「そこからは一人で」

そして部屋の前に来た扉は謎の素材で出来ていた。そして部屋の扉を開けた。

「うわ、これは酷い」

部屋は意外と明るい。床は血で汚れたし壁はボロボロだし最悪だった。

そして背中に宝石みたいなものがぶら下がった羽を生やした金髪の少女が寝転がって寝ていた。膝を立てて寝ていたのでピンクの下着が丸見えだった。これは眼福（^{ハアハア}ハハ）

「お、落ち着くんだ俺」

その時彼女が起きた。そして顔を真つ赤にして

フ「ん、きゃああ何見てんの変態」

「イ、エアア」

近くに転がっていたぬいぐるみを全力で投げて来た。今は精神状態安定してるらしい。そしてそれが直撃して吹っ飛んだ俺は壁に叩きつけられ気を失った。

その頃のレミリア

レ「生きてるかしら」

咲「さあ知りません」

そして気が付くと彼女に膝枕されていた。え、何この状況
フ「さつきはごめん」

「そう言えば俺、お前の姉にお前の相手してって言われたんだ」
フ「私はフランドール・スカーレットお兄さんは？」

「俺は山崎」

フ「よろしくね変態」

変態とか言われたよ酷い

「何して遊ぶか」

多分高確率で「弾幕ごっこ」と言うだろう。

フ「私弾幕ごっこしか知らないんだ」

「俺が教えてやるよ」

まずトランプでもしようか。俺はトランプを創り出しババ抜きをする
ことにした。そして彼女にルールを教えた。そして3回ぐらいし
たが全部フランが勝った。俺結構自信あったのに

そして次はオセロ、チェスなどをやったが全部俺が負けた。さつき
教えたばかりの奴に負けるなんて俺泣きそうだ。

その後は外の世界の話をした。

フ「お父さんいないんだ」

「お母さんが頑張ってくれたよ」

その後咲夜がフランの食事を持って来た。彼女は生きている俺を見
て驚いていた。

そして俺は食堂で夕飯を食うことになった。

レ「どうだった」

「普通だったよ」

レ「でも油断はしないでね」

その後俺は再び地下へ向かった。

フ「また来てくれたの」

「少し部屋綺麗にするよ」

俺は「綺麗にする程度の能力」で床や天井の血痕や煤を取り除いたり「直す程度の能力」でボロい壁を直してベッドもズタボロなので綺麗にしておいた。

フ「何したの」

「能力だ。壁紙は何色がいいイメージしてみろ」

フ「えーっと」

俺は彼女のイメージを「相手のイメージを受け取る程度の能力」で受け取り「想像したことを創り出す程度の能力」で創った。すると白にピンクのハート柄の壁紙になった。

それを壁に付けると部屋の雰囲気明るくなった。

「これでいいか」

能力を使い過ぎたのか俺は凄く疲れたので寝てしまった。

フ「ベッドに寝かしておこう」

そして彼をベッドに入れた後自分も入って一緒に寝た。

第3話

朝起きるとフランと一緒に寝ていた。俺の右手は彼女のスカートをめくっていて彼女の黒の下着の中に入っていた。えええええ、どうしてこうなった。

「昨日寝てしまったのか」

フ「きゃあ何してんのよ馬鹿、変態」

フランが起きたそして俺の右手を掴み思いっきり投げられた。右腕が千切れたので腕を治した。痛いつてレベルじゃねえぞ！

フ「ごめんやり過ぎた」

その時咲夜が来た。そしていきなり殺そうとナイフを投げて来た。

咲「妹様に何をしてるの」

「＼（＾o＾）／」

そして気が付くと目の前に大量のナイフがならんでいた。俺がナイフを壊す前にフランが壊した。

そしてとてもいい笑顔で（ただし目が笑っていない）レーヴァティンを彼女に向けてこう言った。

フ「起きてすぐに物騒な事しないでよ」

咲「分かりました（チッ彼さえいなければ二人とウッフな事が出来るのに）」

フ「で何しに来たの」

咲「朝食が出来ましたので彼を探してました」

そして食堂

「（ん文々。新聞だ見てみよう）」

俺はテーブルの上に置いてあった新聞に目が付いた。

「（今日博麗神社で祭りか）」

多分、行けないな。

レ「貴方今日は夕方から休みにするわ外に出てもいいわよ」

レ「ただしフランは連れて行ったらどうなるか分かってるわよね」
多分殺されるだろう

「わ、分かった」

フ「いつ出れるのかな」

そして俺はその後レミリアに仕事を頼まれた内容は「図書館に来る霧雨魔理沙を追い返す」ことだった。

そして彼女が来た。パチュリーと戦っていた。

「行くぞ」

魔「誰だ」

そして俺は彼女に近づきスタンガンで痺れさせショックで動けなくなっているうちに鎖で柱に縛り付けた。

パ「助かったわ」

そして魔理沙は彼女に何処かの部屋へ連れて行つた。

魔「離せ」

その後そこから悲鳴が聞こえた。透視してみると魔法薬の実験台にされていた。自業自得だが気の毒だ。その後お礼にお金を貰った。

その後は暇だったので自分の部屋で創りだしたノートパソコン（インターネットが出来るように弄って、バッテリーは容量を弄って無限にした）で外の情報を見た。そして東北地方で地震が起きて津波で大被害を受けたことを知った。被災した岩手県陸前高田市は俺の母の出身地で祖父母が住んでいたので心配だった。そして祖父母の家へ紫の能力で向かった。

家は跡形もなく消えていた。そして人を探す能力で二人を探した。付いた場所は高台にある学校だった。津波が来る前に避難したのだろうか。

そして探しまわっていると二人がいた。俺は無事を確認した後帰った。帰った後フランの部屋へ向かった。開けた瞬間喜んで飛びこんで来た。俺はとっさの判断で種族を吸血鬼にして受け止めた。してなかったら大怪我するところだった。

「ふう危なかったあ」

フ「あれ羽が生えてるよ」

「今種族を変えたんだ」

そして俺は種族を元に戻した。

フ「どんな能力」

「いろんな能力を使えるんだ」

フ「すごいね」

「祭り行きたいか」

フ「でもそんなことしたらお姉様に殺されちゃうよ」

「大丈夫俺は死なない」

フ「うん行くよ」

そして夕方まで一緒にチェスなどをした。

第4話

そして俺はフランと一緒にスキマで博麗神社へ向かった。フランの服装はばれにくくする為に帽子を脱いで花の髪飾りを付けて黒のワンピースを着ていた。羽も消している。

フ「似合ってる？」

「ああ、似合ってるよ」

近くで射命丸が写真を撮っていた。

射「あれは紅魔館の吸血鬼の妹」

そして数分後

フ「あれ何」

彼女が指さしたのは輪投げであつた。

「輪投げと言つて輪を投げて景品に載せるやつだ」

フ「やつてみよ」

「力出し過ぎるなよ」

フ「それっ」

そして結果は全て外れた。残念賞は玩具の指輪だった。それを俺に預けた。

「次はくじ引きか」

そしてくじ引きの結果はフランが外れのうちわで俺は古い西洋の剣だった。景品つてレベルじゃねえぞ。

「何だこれ」

そしてたこ焼きを近くの椅子に座つて食べていた。

フ「ねえ何で私の為に命懸けでこんなこと出来るの」

彼女がそう聞いてきた。

「お前の事好きなのか」「もう馬鹿っ」

そう言いかけると彼女に叩かれた。

その頃のレミリア

レミリア視点

予想通り彼がフランを連れて行った。私は彼を試すことにした。フランにふさわしい男かどうかを

パチュリー視点

妹様はこの前来た外来人を気に入ったようだ。前よりも精神が安定してきた。

フラン視点

最初はただの変態でゴミ野郎と思っていけどーは外の遊びを色々と教えてくれた。部屋も綺麗にもらった。

何故お姉様は私と遊んでくれないのか分からない。多分私が恨んでると思っっているのかな。私は彼と何処かへ行くことにした。でもお姉様は絶対私を連れ戻しに来る。でも彼は命懸けで守ってくれる。そんな彼が少し気に入った。

その頃俺はフランにこれからどうするか聞いた。

フ「もう戻らないよ何か分からないけどーと一緒に居たい」

「でもレミリアの気配が近づいてきた」

俺は種族を回復が早い吸血鬼・力の強い鬼を混ぜたものにし、妖力も増やしまくってレミリアとの戦闘に備えた。角は頭の側面に黒いのが二本生えた。

第5話

そしてレミリアと咲夜が俺たちを見つけて近くに降り立った。殺気が溢れていた。

レ「フランを渡しなさい」

「だが断る」

レ「今何て言ったのよく聞えなかったわ」

「だからことわるおっと危ない」

二回目を言いかけた時グングニルが飛んで来た俺は手でそれを碎いた。

レ「咲夜」

咲「はい」

そして気が付くと俺はナイフで刺されてサボテンみたいになっていった。しかしすぐそれを破壊して

咲夜を能力で眠らせた。

フ「すごいあのグングニルを」

そしてすぐレミリアが近づいてきた。俺はすぐ彼女を鬼の怪力で押し返した。彼女は30mくらい飛んで

地面に落ちた。しかしすぐ俺の元へ飛んでいきグングニル大量に飛ばしてきた。

俺はグングニルの向きをすべて彼女に向けた。レミリアはすぐ逃げ次の技をやるうとしていた。

今度は電柱ぐらいの長さのグングニルを投げて来た。俺は前に使ったクラウド・ソラスで真つ二つにした。

その時空間が歪んだスキマではなかった。俺とフランはなす術もなくそれに飲み込まれた。

「何だこれは」

そして俺は気を失った。

レ「咲夜、帰りましょもうどうでもいいわ」
咲「はい」

その光景を八雲紫は見ていた。
紫「さっきのは何？空間の歪みかしら」
彼女は不思議がっていた。

次の日新聞に小さく一とフランが映っている写真があつて「悪魔の妹祭りデート？」と書いてあつた。

フラン視点

気が付くと私は何か文字が書いてある紙が貼つてある紐で縛られていて周りでは四人の男の人が意味の分からない言葉を唱えていた。壊そうとしたけど体が自由に動かなかつた。一はどこ行つた。

第三者視点

そして彼らが唱えるのを止めた。どうやら何かが終わったようだ。そしてその近くにいた陰陽師の男が口を開いた。
陰「どうやら完成したようだ」
術者「しかし見たことない妖怪だ」

その頃一は・・・

彼は何処かで倒れていた妖気が結構出ていたので陰陽師の大群に取り囲まれていて一触即発の状態だった。

第6話

目を覚ますとフランは居なくて陰陽師に取り囲まれていた。
陰「目を覚ました」

そして一斉に札や術で攻撃し始めた。集団リンチだな。しかし俺は体から大量の妖気を出した。

すると札が消滅し陰陽師が全員気を失った。その時援軍が来た。何とそこにはボロボロのフランが術者によって操られていた。肌蹴た胸元には謎のマークが付いていた。彼女は苦しそうだった。

「どうしてこうなった」

術「やれ」

フ「嫌あア止めテ」

フランは嫌がったしかし体が動き出しレーヴァティンを構えた。

「すぐ止めてやるよ」

そして先に彼女が攻撃してきた。俺は祭りで貰った剣を抜いてみた。そして妖力を流すと錆びてボロボロだった刀身が赤くなって刀身が波打った形の剣フランベルジェになった。そして背中中の吸血鬼の羽が赤い羽根になった。今度は鳥の羽だった。どうしてこうなった。

そして彼女の攻撃を受け止めるとレーヴァティンから出ていた炎が全部俺の剣に奪われた。

「こいつは行ける」

フ「止めてもう戦いたくないあああああ」

しかし術者はお構いなしに続けた。奴らは後で処刑だ。

そして彼女の動きを動き関係の能力で止めた。そして胸のマークに触れてみた。すると彼女の心の中へ侵入出来た。

「暗いな」

そして奥にフランがいた。彼女の下半身は闇に埋まっていたんだん沈んで来ていた。俺はすぐ彼女をそこから引きずり出した。そして目の前が明るくなり心から出て来た。胸のマークが消えていた。

術「動かない」

フランは気絶したのでスキマに入れておいた。

「処刑タイムスタートだハハハ」

そして彼らに剣の雨を降らせた。

術「何だこれは」

そして数分後術者達は肉塊になっていた。そしてすぐそれを灼熱の炎で焼いた。

そしてスキマで適当に移動した。

付いた場所はヨーロッパの大通りだった。人が沢山いた。そして鎧を着た騎士が髪が紫色の女性を囲んで歩いていた。彼女は魔力を持っていたので魔女狩りらしい。その時近くに居た男に話掛けられた。そして小さな声で

？「俺の娘を助けてくれないか」

そう言った。（言葉の壁を消した）彼女の父親らしい
「分かった」

俺はそれを引き受けたそして彼女を囲んでいた男を全員気絶させ彼女と父親を連れてスキマに入った。

そして森の中に着いた。

魔女「助けてくれたんですか」

「名前は？」

魔女「アリア・ノーレッジです」

え、ノーレッジと言う事はパチュリーの先祖か。

「俺は山崎」

ア「東の国の人ですか」

「そうだ」

父「これからどうしようか」

ア「魔界と言う場所があるらしいわよ」

父「そこに行こう」

その後アリアが地面に魔法陣を描き始めた。

数分後・・・

ア「出来ました」

父「これはお礼です」

と彼が袋を渡した中にはお金が結構入っていた。

「いいのかこんなに」

ア「大丈夫です。では」

そして何やら呪文を唱えると魔法陣が光り出し二人の姿が消えた。

そしてしばらく自然を満喫していると後ろから悲鳴が聞こえた。

？「嫌あ止めて」

？2「殺す前に楽しませてくれ」

そこを見ると腰に剣を差した男が女性の服を脱がして犯そうとしていた。

俺は彼を後ろから殴った。すると彼は気絶した。彼女は妖怪だった。

女「助けてくれてありがとう」

そして抱き締められた。胸が当たりまくっていた。

「ちよつと離れる」

そして引き剥がした。

女「私狼人間なんですほら」

そして尻尾と耳が生えた。

「名前は」

女「セレナ・フェンリル」

女「では私はこれで」

そして狼になって何処かへ走って行った。

そしてスキマの中に戻った。丁度フランが起きた。そのまま俺に抱きついた。

フ「会いたかったよ」

そしていきなりキスされた。

「（フランとキスなんて夢のようだ）」

フ「愛してる」

「俺もだ。ずっと一緒だ」
そしてしばらく抱き合った。

第7話

研究所

西園寺は一が落ちたスキマの映像を見ていた。

西「一体これは」

数分後副所長の神戸が入って来た。

神「脱走した奴がいました」

西「誰だ」

神「東昇です」

西「そうか始末しろ」

外

東「ヤバい逃げれない」

後ろから銃を持った5人の男が近づいてきた。

八雲紫はその光景を見ていた。

紫「彼、能力ありそうね」

そして彼の足元にスキマを開いた。

東「ん？アアアア」

西園寺は監視カメラで見ていた。

西「彼と同じ空間の裂け目か」

別次元の一は寝ている彼らの様子を見ていた。

「この世界の俺か」

「いいこと思いついた」

そしてフランと彼ににある薬を注射した。

「さて帰るか」

起きるとフランに猫の耳と尻尾が生えていた。え、どうしてこうなった。

フ「ん、何これ尻尾？」

「起きたらそうだった（しかし可愛いな）」

そう考えると思いつき殴り飛ばされた。

「何で俺の思考を」

フ「そんな感じだったから」

そして彼に背を向けた。尻尾が上がっていてスカートの中のピンクの布が見えていた。

「（今日も同じ色）」

フ「見ないでよ」

「ギャアアア」

そしてまた殴られた。

フ「まあ一だったら別に」

「.....」

俺は彼女の耳を触ってみた。自分でも何を考えているかよく分からなかった。

フ「ひゃあ、ん、あ、駄目」

何か顔がエロくなって来た。次は尻尾を触った。

フ「ん、らめえ」

「これがいいのかこれが」

フ「もう限界」

そして彼女がふらふらになった。

「あれ、何やってるんだ俺」

俺は体が熱くなってきた。媚薬？彼女も息がおかしかった。

フ「ふふふ」

そしてそのまま「お察し下さい」をしてしまった。勢いって怖い。しかし初体験の相手が彼女とは驚きだ。

それを見た別の世界の一は

「媚薬と猫の薬（副作用は媚薬の症状が出る）上手く出来たみたいだ」

と薬の効果を見ていた。

事後

フ「責任とってね」

「ハイスミマセン」

彼女はとてもいい笑顔（目が笑っていない）でそう言った。もう耳と尻尾は消えていた。

その後俺たちはスキマから出た。そこは山で天狗がいた。

その頃天魔の黒羽舞は彼女の地位を狙っていた天狗達に追い詰められていた。彼女の親衛隊が満身創痍になりながらも能力が上手く使えない舞を守っていた。
親「くそもう限界か」

そのころ俺達は天狗に見つかり尋問されていた。

天狗「天魔が一大事の時に侵入者か」

天魔が大変らしい俺は助けようと思った。

「どこだそいつは」

天「お前には関係ない」

「俺が行ってくる」

天「はあ」

「教えろ」

そして俺は殺気と彼を上回る妖気を出した。彼は怯えて居場所を吐いた。

天「山の頂上付近の西にある建物です」

「行くぞフラン」

フ「うん」

そしてそこまでスキマで向かった。

？「離して」

そこでは数人の天狗が黒い髪为天狗の少女の服を脱がそうとしてい

た。

天狗「殺すには勿体n」

俺はすぐその中の一人を後ろから殴った。まだ鬼だったので頭がスイカのように割れて死んでいた。他の奴らが俺へ槍や刀を向けた。

「かかって来い」

そして俺に一齐に刺したが俺に刺さらずに折れた。

天狗「ひい」

「動くな」

俺は彼らの動きを妖気で作った鎖で縛って止めた。

？「貴方は一体」

そして裏切った天狗は白狼天狗と一人の鬼によって連れて行かれた。鬼が全くなかったので地底へでも行ったのだろう。彼は残ったのだろうか。

その後俺は宴会に強制的に参加させられた。

そしてさっき助けた彼女が絡んで来た。フランと周りの天狗から物凄い殺気が感じられた。

「ん、何だいきなり」

？「酔ってません貴方の名前は」

「俺は山崎一だが」

？「私は天魔の黒羽舞です」

「で何の用だ」

舞「お礼です」

そして彼女にキスされた。さらに殺気が強くなった。

フ「別に一人ぐらい増えてもいいよ」

彼女はそう言ったが目が笑っていなかった。

「どうしようこの状況」

天狗「ヒヤッハー奴を殺れー」

「「オオオオー」」

そして天狗達が襲って来た。

舞「止めなさい」

彼女が目の笑っていない笑顔で殺気を出しながらそう言つと全員気絶した。

そして宴会が終わつた。酔い潰れて倒れている天狗もいた。その時一人の天狗が来た。

？「あの私こういうものです」

そしてそれに書かれていたのは「文々。新聞編集者兼記者 射命丸文」と書いてあつた。凄い本物だ。

「で何の用だ」

文「貴方の事を色々聞きに来ました」

そして数分ぐらい名前やフランとの関係種族e t cと色々聞かれた。さてどんな風に情報が弄られるのか。

舞「あの今日泊まるところありますか」

「別にあつてもスキマだが」

フ「まさか」

舞「では泊まつて行きませんか」

「フラン、いいか」

フ「勝手にしてでも一緒に寝よ」

そして彼女に連れられて家に着いた。そして案内された部屋に二人ぐらい寝れる布団と一人用の布団があつた。

舞「私はこっちの布団で寝ますのでお二人はこれで」

そしていきなり目の前で着替え始めた。下着は黒だった。

フ「胸が負けてる」

「おいちよつと人前で何を」

舞「ふふふ嬉しいですか」

え、何このエロゲ的展開は。

「フラン俺は貧乳でも食つちまう男だぜ」

俺はそう言つて落ち込んでいるフランに言つた。

フ「そう言えばパチュリーの図書館に似たようなセリフの漫画があった」

えあそこってそんなもん置いてあったのか。しかも読んだのか。
舞は黒い浴衣に着替えていた。

そして眠っていた俺は目が覚めた。よく見ると舞が俺の隣に居た。
フランは熟睡していた。

舞「ふふふ」

そして俺に脚を絡めて俺の右手を掴み自分の服の中の胸に持って行った。柔らかかった。

「何してるんだよお前はよう」

舞「ふふふ」

さつきからずっと「ふふふ」しか言っていなかった。そして俺の上
に乗り服を脱いだ。

「まさかお前」

舞「頂きます」

「アアアア」

フ「ごゆっくり」

フランは起きていた。

そして「ぴー」して寝た。

第7話（後書き）

東は幻想入りした時期以外「東方小説」と大体同じ設定です。

第8話

そして俺は舞に頼まれ能力を使いこなせるようにした。方法は俺の能力の一つ「能力を使いこなす程度の能力」を「移す程度の能力」で彼女に移した。能力は「向きを司る程度の能力」と「速さを司る程度の能力」らしい二つ持っているのか。

舞「早速やってみます」

そして彼女は能力を使った。俺が後ろに向いた。

舞「もう一つもやってみます」

そして彼女は石を投げ速さを増やした。するとかなり速くなり近くに置いていた鉄板を貫通した。

「結構凄いな」

それから数年過ごした後何処かへ向かった。そして適当に行くと神社に着いた。博麗神社と書いてあった。と言う事は昔の巫女がいるのか。

数分後誰かが来た。服装からして巫女だった。かなりの霊力があつた。

巫女「その妖怪何しているんですか？退治しますよ」

そして札を投げて来た。俺は妖気を出したすると札は灰になった。

巫「効かない」

その後結界で閉じ込めて来たがフランが破壊した。

「落ち着け」

そして俺は彼女を眠らした。

そしてスキマで適当な場所に向かった。そこは向日葵が沢山咲いていた。まさか此処は風見幽香がいるんじゃないか。

？「何してるの」

後ろから話しかけられた。振り向くと緑色の髪の赤いチェック柄の服を着た綺麗な女性がいた。どう見ても幽香さんです本当にありがとうございました。

「適当に来たら此処に着いた」

幽「貴方強そうね」

そしていきなり殴って来た。

「フラン下がっつけ」

フ「うん、分かった」

そしてすぐ避けて創ったメイスで応戦した。ぶつかることに衝撃波が発生した。

そしてしばらく繰り返していると持っていた傘に妖気を集めて太い光線を撃ってきた。俺は防御力を上げまくった。そして飲み込まれた。

幽「本気出さない」

そう言われ俺は本気を出すことにした。赤い羽根をだして妖気と殺気を上げて行った。

すると彼女は冷や汗を流して気を失った。

その後彼女を家に運んで別の場所へ向かった。

そして歩いていると陰陽師に襲われて壊滅状態の村があった。

陰「まさか妖怪が紛れていたとは」

妖怪と一緒に暮らしていたらしい。

俺は壊滅した村をみた中央には殺された村人が集められていた。中には子供もいた。俺はそれを燃やしてそれを埋めて近くの岩で墓石を作り手を合わせた。フランも俺を見て合わせた。

俺たちは彼らに気付かれて攻撃された。

陰「何をしてる」

「供養しただけだ」

陰2「妖怪に毒された村人にする価値は無いな」

彼は村人を馬鹿にするようなことを言った。

陰「お前も退治だ」

「やれるもんならな」

陰「喰らえ」

そして彼は札を投げた博麗の巫女の物より劣っていたのですぐ灰に

なつた。

陰「効かない」

「帰れ」

彼をおまいつきり殴り飛ばした。彼はグチャグチャになって遠くに飛んで行った。

その時幽香が来てもう一人を傘で刺して殺した。

「何でお前が」

幽「こいつが私の花を踏んだから」

「そうか」

幽「さよなら」

そして夜スキマの中に創った家の中では

「寝るか」

フ「ねえ、血吸っていい」

そして首を噛んで血を吸った。痛くは無かった。

フ「美味しい」

そして寝た

その頃現代

一の母の葬式会場では親戚や父の友人、母の旧友、同級生、妹、その他親戚が集まっていた。

妹「一君はまだ見つからないようね」

父の友人「見つかるといいな」

彼のことを心配していたが内心一の親権を得れなくて残念だった。

登場人物

東昇

年齢 30歳

種族 人間 半吸血鬼 吸血鬼

能力 否定する程度の能力

物理法則、概念など様々な物事を否定する。

説明 研究所から脱走中スキマに落とされ幻想入りして紅魔館で住みこみで働いた。満月の夜暴走した

レミリアを止めようとして死亡するが吸血鬼として復活する。その後夫婦になる。

佐藤渉

年齢 16歳

種族 人間

能力 刀剣類を創造する程度の能力

説明 一より少し前に研究所に来た。

ジョン・ホワイト

年齢 40歳

種族 人間

能力 無し

説明 日本出身のアメリカ人男性で白人。研究所の創設に関わった。

セレナ・フェンリル

年齢 消されました

種族 人狼

能力 炎を司る程度の能力

説明 昔一に怪物退治の男から助けもらった。紅魔館でメイドになった。

黒羽舞

年齢 消されました

種族 天魔

能力 能力を使いこなす程度の能力
一から移された。

向きを司る程度の能力
重力、日光、風向きなど様々な向きを操れる。

速さを司る程度の能力
時間以外の速さを操れる。

説明 彼女の地位を狙っていた天狗達によつて殺されそうになつた
が一に助けられた事によ
り好きになつた。彼に積極的になつた。

第9話

そしてある日フランが一人で散歩しに行った。俺は後から追いかける予定だ。

「そろそろ行こう」

そして彼女の妖力の跡を辿っていた。そしてフランを発見した。彼女は鬼に押さえつけられていた。

体には白い液体が付いていた。

鬼「大人しくしろ」

フ「嫌あああ止めて」

そして彼女を殴った。

鬼「それじゃあやるか」

フ「きゃあ」

鬼「ん、こいつ処女じゃないな中古は要らねえ死ね」

彼は酷いことを言った。そして腹の立った俺は彼の前に立った。

鬼「何だお前鬼か」

そして右手で殴って来た。俺は彼の腕を掴み引き千切った。そして食べてみた。あまり美味しくなかった。

「うえ不味い」

鬼「何なんだよ」

そして彼は逃げようとした。俺は彼に足を引っ掛けて転ばして両足を踏み潰した。

鬼「ひ、ひい」

そして俺は創ったメイスに妖力を集め彼に叩きつけた。彼の体はグチャグチャになり肉片や内臓が散乱した。

フ「うわあん一怖かったよ」

彼女は俺に抱き付き静かに泣いた。そして気を失った。一緒に行けばよかった。

それを紫は見ていた。

紫「派手にやったわねあの妖怪」

その時藍が彼女を呼んだ。

藍「夕食が出来ました」

紫「今行くわ」

そしてスキマを閉じた。

俺はそれを偶然見た。

「ん、あれは紫」

その頃現代

一の学校

遊び仲間の岡村徹、中島幸二は屋上に居た。

中「一の母親死んだらしいな」

岡「あいつ何してるんだろっな」

その頃研究所

西「やはり幻想郷か」

彼は倉庫で見つけた先祖代々伝わる幻想郷縁起（五代目阿悟の時代の物）を見ていた。

西「無理だ止めよう」

彼は一や昇の事を完全に諦めた。

第10話

その頃の紅魔館 現代

昇は紅魔館で暮らしていた。

レ「はい昇あーん」

昇「恥ずかしいから止めろ」

パ「鬱陶しいわね」

小「ラブラブですね」

咲「・・・（ハアハア）」

そして俺たちは二人で旅していた。途中で盗賊から人間を助けた。

男「お前ら妖怪か」

男2「来るな」

助けたのに酷いことを言われた。

「行くぞ」

今は明治初期だった。そして俺は羽と角を消してフランも羽を消して町に行った弱点も無くしておいた。そして服装は人々の心を弄つて気にされないようにした。

「結構賑わってるな」

そして和菓子屋で休憩した。フランは饅頭で俺もそれだった。

そして数年後、明治18年幻想郷が結界によって隔絶された。

さらに数年後幻想郷

あかはねひてん

赤羽緋天という妖怪が空を赤くして妖怪が凶暴化するという異変を

起こし紫、幽香、

当時の博麗の巫女博麗霊香と死闘を繰り広げていた。

彼は三人の攻撃を受けても無傷だった。

緋「まさかこれで終わ리と思ったのか」

霊「嘘」

幽「ぐ、まだ行けr」

幽香は意識を失いスキマへ落ちた。

紫「幽香がやられた」

緋「行くぞ」

そして赤い空から赤い妖気で出来た槍が降って来た。二人は結界で防いでいた。

紫「不味いわね」

数分後二人の結界にヒビが入って来た。そして霊香の結界が割れた。そして彼女に降り注いで原形を留めないほどグチャグチャになった。

紫「霊香！」

そして槍の雨が止まった。

緋「一人になったな」

紫「そんな、霊香が」

そして赤い剣を出した時、誰かが来た。

？「遅くなったな」

紫「誰」

？「俺は白羽幻華だ」
しろはねげんか

幻華と言う男は銀髪で白い翼が生えていて手には刃が黒い大鎌を持っていた。

そして緋天に斬りかかった。

緋「お前も羽を持つているのか」

緋天は受け止めながらそう言った。

その頃――

俺は久しぶりに舞に会いに妖怪の山にある舞の家に来ていた。

「何かおかしい」

何故か空は赤く染まり下級妖怪が凶暴化して暴れまわっていた。

天狗達はそいつらの相手をしていた。その時舞が来た。

舞「今異変が起きてるようで今その対処で大変なんです、博麗神社

で黒幕の妖怪と戦っているようです」

「行ってくるよ待っていてくれフラン」

フ「うん分かった絶対生きて帰ってきてね」

「分かってるよ」

そして博麗神社に着いた。そこでは鎌を持った男と俺と同じ羽根を生やした男がお互いの胸を刺して落ちて行っていた。合い打ちか。近くにはあの八雲紫が居た。

緋「ガハッ此处までか」

幻「そうだこれで終わりだ緋天」

紫

そして二人は白い光の粒になって消えて彼が持っていた俺と同じ剣は何処かへ飛んで行った。

もしかしてこの剣は彼のだったのかもしれない。鎌は光の玉になって飛んで行った。

そして空が元に戻った、今は夜だったらしい。

そして二人の元へ帰った。

その夜

舞「久しぶりにしてくれますか」

俺は舞と「バキューン！」した後フランとやって寝た。

後日この異変は「紅夜異変」と名付けられた。そして新たな巫女が決まった。

ある日暇だったので式神を作ってみた。一つ目は黒い羽根を生やして黒い執事服で白髪のお紳士で名前は自分から「ノワール」と名乗った。2つ目は大人が乗れるくらい大きな鳥で体が黒い炎で覆われていたそして二羽に分かれるようだ。俺は二羽うちの炎が青い方を「フギン」黒い方を「ムニン」と名付けた。由来は北欧神話に出て来るオーディーンに付き添う鳥からだ。分裂前は「黒炎」と名付

けた。ノワールは剣術に長けていた。彼の剣はレイピアで名前は無い。彼の斬る速さはとても速く見えないぐらいだった。

そして数年後俺はフランと一緒に幻想郷を出た。

付いた場所は何処かの島で時代は1943年だった。近くから爆音や銃声が聞こえた。近くには日本兵が一人倒れていた。

まだ生きていた。彼の顔を見て俺は祖父の若い頃の写真を見せられた事を思い出しその顔と同じという事に気付いた。祖父は俺と同じような顔の奴に助けられた、と話していたことがあったので俺が助けるのだろうか。そして俺はアメリカ軍の「降伏しろ」と聞える場所へ持つて行った。

フ「その人は」

「俺の祖父だ」

フ「祖父？」

「お父さんのお父さんのことだ」

そして人間の姿になり彼を連れて行った。

米兵「誰か来たぞ」 英語です

米兵2「とりあえず保護しろ」

そして米兵が近づいてきた。俺は彼を地面に置くと適当にスキマで移動した。

そこは横浜の赤レンガ倉庫だった。俺はすぐ写真に撮った。その時近くから悲鳴が聞こえた。

そして聞えた場所に行くと金髪で青と白の服を着た少女、旧作のアリスが男に押さえつけられていた。

この状況に出くわすの何回目だろうか。

ア「キヤア止めて変態、触らないで」

変「うへへ」

「おいお前」

変「？」

俺は男を気絶させた。

「迷子か」

ア「此処どこ分かる」

フ「誰？」

ア「アリス、貴方達は」

フ「フランドール・スカーレット」

「山崎」

ア「それで此処どこ」

「横浜」

ア「何それ美味しいの」

「お前の家魔界か」

ア「どうして知ってるの」

「気にするな」

そして彼女を神綺の元へ連れて行つた。

神「見つけてくれたの」

そしてお礼に金と一冊の魔道書を貰った。

そしてしばらく町を散策していると以前助けたアリアに出会った。

ア「久しぶりですその子は」

フ「フランドール・スカーレット」

「そう言えばこの魔道書やるよ」

俺は神綺に貰った魔道書を渡した。

ア「ありがとうございますこれはお礼です」

そして二つの金で出来たネックレスを貰った。黒い宝石が付いていた。

「いいのか」

ア「別にいいんです」

現代の幻想郷

一の偽物が幻想郷各地を襲撃していた。

博麗神社

賽銭箱や鳥居が壊れ霊夢も怪我をした。近くには魔理沙もいた。同じように怪我をしていた。

霊「何なのあいつ」
魔「スペルカード使ってないぜ」

妖怪の山

守矢神社も襲撃されて石畳がボロボロになり洩矢諏訪子、八坂神奈子、東風谷早苗が負傷した。舞は無事だった。山は警戒態勢を強めた。

神「何て強さだ」

諏「神を圧倒するなんて」

早「信じられません」

そして風見幽香の居る花畑は焼け野原になっていて彼女が倒れていた。

幽「彼の姿でこんなことするなんて許せないわね」

彼女は偽物と気付いた。

紅魔館

庭がボロボロになり咲夜、美鈴が重傷でレミリアと昇は大丈夫だったが服がボロボロだった。

唯一無事だったパチュリーが手当てをしていた。

レ「何なのあいつ」

昇「一じゃないなあれは」

命蓮寺

ナズーリン、白蓮、星、村紗が倒れていた。外傷は少なかった。
白「何でしょうか彼は」
星「大丈夫ですか」

人里は大騒ぎになっていた。

射命丸は号外をばら撒いていた。

文「（あれは一さんじゃありませんね、だとすると偽物？）」

数日後博麗神社に彼が現れた。

霊「来たわね」

？「落ち着け戦う気は無い」

霊夢はお札等を手に取って構えていた。しかし突然体が動かなくなつた。

？「2日後に俺がここへ連れて来た奴らと戦ってもらう」

そして彼は消えた。

霊「体が動いた」

そして紫を呼んだ。

霊「紫ー！」

その時彼女の目の前の空間が裂けて紫が出て来た。

紫「何よ」

霊「さっきあいつが来て「2日後に来る」って言ったの」

紫「そう、彼女を使って伝えときなさい」

そしてもう一つスキマが開き烏天狗の射命丸が落ちて来た。

文「何なんですかいきなり」

霊「二日後にあいつが来るって伝えておいて」

文「え」

霊「やらないと焼くわよ」

霊夢はそう言つて一番強い札を持って脅すと彼女は一目散に飛んで行った。

緋天の話

俺は赤羽飛天、幻想郷のある村に住んでいる人間だ。

俺はある人と恋人関係だった。彼女の名は南雲美雪^{なぐもみゆき}で村の端に一人で住んでいる。彼女は半人半妖らしく誰も話しかけようとはしなかった。しかし彼女は美しく優しかった。親父は彼女との関係を反対しなかった。

そして彼女の家

「美雪来たよ」

美「今日も来てくれたの」

「今日は夕飯作ってやるよ」

美「何作ってくれるの」

「秘密だよ」

美「ご飯は今炊いてるからおかずだけでいいわよ」

鍋にするつもりだ。中身は鶏肉と野菜と茸で味付けは醤油だ。

そして出来た後

美「美味しそうね」

彼女は喜んでくれた。

「「頂きます」」

「味はどうだ」

美「美味しい」

「そうかそれは良かった」

食後キスをして家に帰った。

緋天の父視点

翌日の早朝大勢の人の足音が聞えた。一体なんだろうか。しかし気にも留めず私は寝た。

そして昼前に見に行くと息子が合いに行っていた女の家の辺りから

煙が上っていた。

村の人は別に気にせずいつも通りの様子だった。こいつらはこのことを前から知っていたのか？

私は近くの男に尋ねた。

「おいあの家どうなってるか知っているか」

男「村の方針であの家を始末しに焼き討ちに行っていたが」

「そのことをどう思う」

男「まあ別に」

俺は呆然と立ち尽くした。こいつらはどうかしている。

視点切り替え

俺はいつものように彼女の家に向かった。最近村に妖怪が出たので護身の為に赤羽家に代々伝わる剣「緋月」を持って行った。そして家に着いた。

「え、何だこれ嘘だろ」

彼女の家は焼け落ち近くには7人の刀や槍を持った人達がいた。近くの木に彼女の遺体が縛り付けられていた。体には無数の刺した跡があり服が半脱いで髪が泥で汚れていた。そして5本の矢が体に刺さった

ままだった。縛り付けられた後的にされたのだろうか。

「み、美雪」

その時近くの男が話していた。

男「やっと化け物が居なくなった」

男2「これで村も平和だ」

俺は耐えられなくなって刀を抜き一人の首を斬った。

「アハハハまず是一人」

男2「何をしてる」

「二人」

二人目の首を斬った。

そして残った五人に囲まれた。

「何をしてる」

「クククハハ八三人、四人、五人、六人、七人！」

そして一瞬で全員の首を斬った後切り刻んだ。

その後美雪の遺体と「消されました」をした後彼女を埋めて村の人が居る方へ向かった。

そして道行く人々を片っ端から殺した。

その後背中に羽が生え緋月の刀身自体が赤く染まっていた。

そして羽から赤い炎が出て村を焼き俺は逃げ惑う人々を殺した。

悲鳴が次々と断末魔に変わった。

その後空が赤くなり妖怪が凶暴化した。俺は突如現れた羽の生えた妖怪白羽幻華と合い打ちになり死んだが刀の中に吸収され長い眠りに就いた。

そして長い年月が過ぎたある日俺は誰かに拾われたらしい彼も愛する人が居るようだ。俺は彼の魂と同化した。愛する者の為にこの力を使うがいい。そして俺の意識は完全に消えた。

登場人物2・設定

山崎一

種族 人間 鬼＋吸血鬼＋？

年齢 不明

能力 あらゆる能力を使う程度の能力
その名の通り様々な能力を使うことができる

能力を使いこなす程度の能力
能力を最初から使いこなせる

説明

幻想入りした後フランとともに過去へ飛ばされた。その後ある日手に入れた剣「緋月」から力を貰い赤い羽根を生やす。

赤羽緋天

年齢 享年24歳

種族 人間

能力 無し

説明 かつて幻想郷に合ったもう一つの人里に住んでいた青年である日半人半妖の恋人の美雪を村人に

惨殺され家にあった刀でその村人を殺した後村を滅ぼし空を

赤くするという異変が起きた。

博麗の巫女を殺し、八雲紫、風見幽香を殺しかけたあと幻華と合い打ちになり死亡するが刀に

魂が吸い込まれ一が使った時に魂と同化して彼の力となった。

白羽幻華

年齢 享年567歳

種族 妖怪

能力 無し

説明 緋天と合い打ちになり死亡する。しかし記録には残っていない。その後昇に力を与えて完全に消滅した。

南雲美雪

年齢 享年23歳

種族 半人半妖

能力 無し

説明 緋天が思いを寄せていた人。彼の住む村の人々から避けられていた。

村人に家を襲撃され死亡。彼女の死は彼を大きく狂わせた。

博麗靈香

年齢 享年17歳

種族 人間

能力 結界を操る程度の能力

結界に封じ込めたり小さくして押し潰す事などが出来る。

説明 歴代で一番結界の扱いに詳しかった。彼女が作った結界は後世に受け継がれていった。紅夜異変の時に死亡する。

設定

羽の一族

赤羽家、白羽家、黒羽家の三つ現在は黒羽家のみ残った。
この一族の物は羽を持つしかし赤羽家は緋天のみ出せた。

第11話

そして百数年後俺が幻想入りした時代になった。今は何処かのアパートに住んでいる。

俺は学校の様子を見に屋上へ来た。昼だった。ちなみに羽と角は消してある。

「ん、あれは」

そこには岡村と中島が居て弁当を食っていた。彼らは俺に気付いた。中「一じゃないか」

岡「無事だったのか」

「行方不明になったり連れ攫われたり大変だったよ」
彼らは何か言おうとした顔が暗かった。

「どうした」

中「お前の母ちゃん死んだんだよ」

俺は信じられなかった。

「え、いつ」

中「一週間前に」

俺が誘拐される前に見たのが最後だったので悲しかった。

中「家はそのまま多分親族が彼女の遺産を狙ってたぞ」

「そうか」

そして俺は家を見に来た部屋には埃や蜘蛛の巣があった。部屋に置いてあるノートパソコンと小説や漫画を持って行った。部屋は綺麗にしておいた。

「帰るか」

俺は母の貯金を銀行で7割くらい引き出してから家にあった俺の自転車（電動）に乗ってフランの待つアパートへと帰った。

「ただいま」

フ「お帰り」

「外に食いに行こうか」

俺は自転車の後ろにフランを乗せて近くのファミレスへ向かった。
今日は客が少なかった。

店員「お二人様ですねこちらの席へ」

席は窓際だった。

「何にする」

フ「えっとこれ」

俺はステーキとパンとスープとコーラでフランも同じ物でドリンクはメロンソーダだった。

そして店を出て駐輪所へ行く途中ある男に呼び止められた。

男「あの私こういうものです」

そして名刺を渡した。『全国陰陽師連合 会長 安倍邦明』と書いてあった。
あへくにあけ

彼は安倍晴明の子孫だろうか。

「まだいたのか」

邦「はい少し妖怪が出ます」

「何の用だ」

邦「とりあえず付いてきて下さい」

「分かった」

フ「行くの」

そして付いて行く途中で彼がこう言った。

邦「倉庫で見つけた本によると妖怪が住んでいる場所があるらしいです」

「それがどうした」

多分幻想郷縁起を読んだのだろう

邦「着きました」

そこは人通りの少ない空き地だったそこには陰陽師の格好をした男や槍や刀を持った奴もいた。妖怪と言うことがバレてたらしい。

「何が目的だ」

邦「その場所を知っていますか」

「普通に行き来出来ないぞ」

邦「そうですか貴方妖怪ですね」

「ばれたなら仕方ない」

俺は羽と角を出して妖力を上げた。何人かが失神した。

邦「何！こうなったら全員で」

失神しなかった三人が来た。

「大人しく寝てろ」

俺は彼らを眠らした。

その後店に戻り自転車で帰った。

フ「お風呂入ろう」

俺はフランと一緒に風呂に入った。

「落ち着かないな」

フランが体を洗っていた。俺は後ろを向いていた。

フ「背中流してあげる」

「え」

そしてフランが背中を洗っていた。俺のあれは大変だった。

「（ばれたらどうしよう）」

フ「あっ」

フランが滑って転び俺のタオルを取ってしまった。そして俺のアレを見られてしまった。フランは顔を赤くした。

フ「お、大きい」

「あああああ」

そして俺はすぐ浴室から出た。

そして寝ることにした。フランが着ていた浴衣の胸元を腹の辺りまで開けた。俺は何故か胸に手を入れていた。

フ「あん」

そしてそのまま「うふふ」した後死んだように眠った。

第12話

その頃の幻想郷

幻想郷の至る場所に『赤い羽根の男にご注意!』と書かれた立て看板が立てられた。

俺はフランと二人で買い物へ行った。

平日なので人が少なかった

そしてショッピングモール

しばらくして悲鳴が聞こえた。何と飲食店エリアに銃で武装した5人の男達がいたテロリストか。

そして放送が流れた。

テ「この建物の全てを我々「ファントム」が占拠した逃げようとしたらこうだ」

そして銃声が聞こえて誰かが倒れる音がした。本気がよこいつら

そして俺たちに銃を向けた。

テ「座れトイレ以外で立ち歩いたら即射殺する」

ショッピングモールは三階建てで2階、3階も同じように座らされていた。

そしてまた放送が流れた。

テ「俺はテロリストのリーダーこいけまさとし小池正敏だ。この建物内のあらゆる場所に爆弾を仕掛けた誰かが出ると反応して爆発する」

その頃外では警察の特殊部隊や警官が待機していた。

俺は彼らが放送している場所まで行くことにした。スキマは不味いのでどうするか考えていると丁度いいことに2人が見回りに行った。そして俺は立ちあがった。フランも行くことにした。

「すみません、トイレ」

テ「着いて来い」

そしてトイレ前の廊下で彼を気絶させ寝かしておいた。そしてスキマで彼らのいる部屋の前へ向かった。

フ「此処に居るの」

「行くぞ」

そして扉を開けた。すぐ近くに頭を撃ち抜かれた男性従業員の死体があった。

そして近くに居た二人が銃を向けた。

テ「動くな」

しかしフランに壊された。彼らは隠し持っていた拳銃で俺に発砲した。

テ「やったか」

「痛いな」

そして俺は彼らを眠らしたその後5人に囲まれて銃を向けられた。

「邪魔だ」

俺はすぐ眠らして奥へ進んだ。そこには縄で縛られた従業員の男女5人が座っていた。俺は創ったナイフで一人の縄を切り彼に渡した。

「これで他の奴の縄を切つてやれ」

従「は、はい」

そして奥の扉を開けたそこには一人の男が座っていた。彼は寝ていたがすぐ起きた。

小池「ふあ、ん？誰だ」

「おはよう、そしておやすみ」

俺は眠らした。

「別のところで買い物しようか」

フ「そうだね」

そして別の大型ショッピングモールの場所へ向かった。

そして家

テレビのニュースで今日の事が取り上げられていた。
アナ「従業員一人が死亡しましたが負傷者は奇跡的にゼロだそうです」

第13話

数日後

暇だったので俺は思いついた。

そうだ、幻想郷へ行こう。

その頃の幻想郷

予告通りに彼は現れた。博麗神社には霊夢、魔理沙、幽香、レミリア、昇、妖夢がいて紫は神社の周りに張った結界に力を送っているので戦えなかった。

霊「来たわね」

偽「連れて来た」

そしてそれを見た魔理沙がこう言った。

魔「馬鹿にしてるのか」

彼が連れて来たのは弱い部類に入るチルノとルーミアだった。

偽「奴らを後悔させてやれ」

そして彼はルーミアのリボンを取ってから消えた。魔理沙は二人に向かってマスタースパークを放った。

チ「今のあたいには効かないよ」

そしてマスタースパークが凍った。その後黒い何かがそれを覆って消した。

ル「封印が解けた？」

そしてレミリアがグングニルを投げた。しかしルーミアが出した闇によって消されてしまった。そして彼女は闇で出来た槍の雨を彼女に降らした。

レ「あ」

しかし昇に存在を否定され槍が消えた。

ル「何したのかしら」

昇「教えねえよ喰らえ」

そして彼は大鎌を大きく振った。しかし当たる直前にその部分が闇になってすり抜けた。そして刀身が黒くて赤いラインが入っている大剣を出して彼を斬ろうと突っ込んで来た。そしてぶつかりあった。

昇「オラア」

昇の鎌が彼女の剣を真つ二つにしたしかしすぐ治った。

ル「これを壊すなんて凄いわね」

そして周りが真つ暗になった。

昇「しまった何も見えない」

そして容赦ない槍の雨が彼に襲いかかった。

昇「グアアアずるい奴だ」

その時鎌が水銀みたいな色の液体になり彼の中に入った。そして羽が蝙蝠みたいな者から白い鳥のような羽になった。色は銀色だった。そして手には刀身がチェーンソーみたいな白い剣が握られていた。

昇「何だこれは前が見える」

そして彼から眩い光が溢れ出して周りにあった闇が消えた。

その頃他の4人はチルノに苦戦していた。

チ「あたい最強」

そして氷の槍の雨を降らした。

幽「あんな強かったなんて」

そして幽香は傘の先からビームを放って氷を吹き飛ばした。

その後妖夢が突っ込んでいったしかしチルノの目の前にあった透明度が高い氷にぶつかった。

妖「こ、氷！」

魔「何だこれ出れないぜ」

霊夢と魔理沙は氷の立方体の中に閉じ込められていた。

その頃昇はルーミアと決着が着いた。

ル「完敗だわ」

ルーミアは地面に仰向けで倒れていた。

レ「昇、羽が」

昇「よく分かんが進化したらしい」

そしてチルノの方へ向かった。

彼女の周りは細かい雪のような弾幕が吹雪のように吹き荒れていた。彼は一気に体から力を噴き出してそれを消滅させ彼女を巻き込んだ。チ「負けたー」

そして二人を閉じ込めた氷の箱は崩れ去った。

霊「本当にチルノ？」

魔「あんな強かったのか」

さっきの彼女は昔消えて復活する前の本来の姿だった。

その時近くから拍手が聞えた。拍手してたのは彼だった。

偽「実にいい戦いぶりだ」

霊「次はあんたよ」

霊夢が札を出した。彼は笑ってこう言った。

偽「じゃあやってやろう」

そして幻想郷に着いた。場所は何処かの神社で石畳が滅茶苦茶だった。

その時大きな柱が俺をかすめた。そこには背中に丸い縄を背負った女性八坂神奈子が立っていた。彼女は機嫌が悪そうだった。

神「また来たか今度は負けない」

「はあ」

神「とぼけるな」

そして柱が大量に降って来た。俺何かした？

フ「何なのいきなり」

フランがすべて壊した。

神「御柱が」

そして彼女は弾幕を大量に放って来た。

「何だよ」

俺は全て赤い剣で吸収した。その時神社の中から目の付いた帽子を被った幼い少女、洩矢諏訪子が来た。

諏「神奈子落ち着いて！そいつは奴じゃない」

神「え」

「喰らえ」

ピチューン

そして俺は彼女に高密度で高速の弾幕を撃った。

そして数分後

神「すまなかつた奴に似てたものだから」

「誰だそいつは」

神「お前みたいに赤い羽を持った男だ」

「俺の偽物か」

その後俺達は舞の家へ向かった。

舞「一さん久しぶりです」

舞を呼ぶと玄関から猛スピードで突っ込んできて結構飛ばされた。人間だったら大怪我だ。

舞「すみません、とりあえず中へ」

そして俺達は彼女の家へと入って行った。

第14話（前書き）

途中、東方神霊廟のキャラが出ます。

第14話

俺は舞に現状を聞いた。

舞「赤い羽を持った男性が幻想郷各地を襲撃したらしいです」

「じゃあ俺やバいんじゃ」

フ「羽隠せるよね馬鹿じゃないの」

「あ、忘れてた」

そして羽を吸血鬼の蝙蝠みたいな羽に戻した。俺は幻想郷の様子を見ることにした。

「フラン此処に居ててくれ」

フ「どこ行くの」

「少し回ってくる」

フ「分かった」

そして山を下りて幽香のいる場所へ向かった。そこは花の殆どが焼けていた。そして後ろから声がした。

幽「貴方はあの時の妖怪」

「久しぶりだな」

幽「何しに来たの」

「襲われた場所を回ってるんだ」

幽「今日は戦う気起きないから早く消えて」

「じゃあまたな」

次は紅魔館を上空から見ていた。庭は滅茶苦茶になっていた。門には包帯を頭に巻いた美鈴が居た。

そして命蓮寺の門の前

近くから大きな声で「おはよーございます」と言う声が聞えた。そこを見ると緑の髪で頭に垂れ下がった耳みたいなものが着いていて箒を持った少女が居た。多分彼女は「東方神霊廟」出て来た「幽谷響子」だろう。

「み、耳がああ」

そして俺は何処かへ歩いて行った。しばらくすると狸みたいな尻尾を生やした眼鏡をかけた女の人を見つけた。こいつは「東方神霊廟」のEXボスの「ニツ岩マミゾウ」か。

その後博麗神社へ向かう途中金髪の黒い服を着た綺麗な女性に出会った。

ル「誰」

「お前こそ」

ル「私はルーミア」

俗に言うEXルーミアか。

「俺は山崎」

ル「貴方妖気があの男に似てるわ」

「赤い羽の奴か」

ル「博麗神社へ行くつもり」

「そうだけど」

ル「今戦闘中よ」

「俺の偽物を片付けに行く」

そして俺は羽を赤い羽にして飛び立った。

ル「（面白そうね彼）」

そして彼女は彼の影に溶け込んだ。

神社には強力な結界が張ってあった。俺はスキマで侵入した。そこには俺と同じ顔で赤い羽根と剣を持った男が数人の男女と戦っていた。その中には研究所にいた東が居た。そして彼は俺に気付き戦っていた奴らを結界に閉じ込めた。

偽「本物のお出ましか」

「俺の姿で好き勝手やってくれたな」

霊「出しなさい」

昇「もうすぐ破れる」

「やるか」

その時何故か羽が6枚になって剣の色が金になった。全身には西洋の鎧が着いた。色は黒かった。カッコいいなコレ

偽物は焦っていた。

偽「そんな、俺も同じはずだ」

「進化前だからじゃないか」

偽「わ、悪かった許してくれ」

「黙れ」

そして俺は彼の胸を貫いた。彼は光の粒子になって消えた。

「しかしコレ凄いな」

魔「マスタースパーク」

いきなりマスタースパークが飛んで来た。鎧は耐えきった。

魔「結界破けたぜ」

霊夢は俺を見た。

霊「何なのあいつ」

紫は結界を解いて彼女たちを見に来た。そして彼を見て

紫「何よあれ」

顔に冷や汗が出ていた。

俺は羽を元に戻したすると鎧も消えた。何なんだこれは。

「帰るか」

そしてスキマで妖怪の山へ戻った。

霊「ちよつと待ちなさい」

次の日の文々。新聞に「赤い羽根の男、天魔の夫に瞬殺！」と書かれて彼の写真が大きく写っていた。

第15話

その頃安倍邦明は部下の陰陽師17人と荒れ果てた神社の前に来ていた。

数名が何かを唱えていた。

安「もうすぐか」

そして光が彼らを包んだ。

俺はフランと幻想郷を回っていた。今は鈴蘭畑だった。

「此処っていう事は」

その時後ろから金髪の幼い少女が出て来た。こいつはメディスン・メランコリーか。

メ「此処に何の用」

「別に」

フ「人形みたい」

メ「私人形よ」

フ「誰も操ってない」

メ「失礼ね一人で動けるのよ」

「それじゃあ」

フ「次はどこにいくの」

俺は魔法の森へ行った。そこには口のある茸が走り回っていた。

数分後「香霖堂」と書かれた看板がある古い家があった。そして中

に入ると禪一丁で鏡で自分の体を見ている男性がいた。森近霖之助か

フ「きゃあああ」

森「ん、ぎゃあああ」

ピチューン

フランはそれを見てレーヴァティンで彼を攻撃した。

数分後

森「すまないね変な所見せちゃって」

森「所で誰だ君は妖力が半端じゃないんだが。そこに居るのは吸血鬼か」

「山崎一で一応外来人だ」

フ「フランドール」

森「あの紅魔館の吸血鬼が新聞に載ってたな」

「じゃあまた会おう」

そして地底の入り口

フ「どこに繋がってるの」

「この中に町がある」

そして穴を下りて行った。

数分後橋に着いたそこには金髪で耳がとがった女性が座っていた。
橋姫のバルスイか

パ「何の用」

「見に来ただけ」

パ「女が居るああ妬ましい」

「通っていいか」

パ「勝手にしなさい」

フ「何この人」

そこは活気があふれていた。

しばらくして額に角を生やした女性に呼び止められた。

？「あんた達見慣れない顔だね」

「そりゃ地上から来たからな（こいつは星熊勇義）」

星「どこへ行くんだ」

「地霊殿」

星「物好きな奴だ」

そしてしばらく歩いていると

？「誰」

「ん」

そこには古明地こいしがいた。

「地霊殿どこだ」

こ「着いてきて」

フ「誰」

そして地霊殿

猫が後ろから着いてきていた。

そしてさとの部屋

こ「お姉ちゃん客が来た」

さ「誰ですか」

俺達は客が来た時用の部屋で待っていた。そして部屋に入ってきた。

さ「一さんとフランドールさんですね」

フ「名前言ってないよ」

さ「心を読めるんです」

フ「そうなんだ」

さ「それで何の用ですか」

「最近来たばかりだから幻想郷回ってるんだ」

さ「外から来たんですか」

そして数分後地霊殿を後にした。

人里付近

妖怪が沢山殺されていた。自警団と慧音はそれを見ていた。

慧「御札？」

自「現役 of 陰陽師は幻想郷にもういませんよ」

慧「と言う事は一体誰が」

次は紅魔館に行った。

フ「此処って紅魔館」

「そうだお前の姉が居る所だ」

フ「美鈴また寝てる」

彼女は立ったまま寝ていた。

そして門を開けようとすると急に起きた。

美「ん、妹様」

フ「美鈴後ろ」

後ろには咲夜が立っていた。

咲「また寝てたの」

美「ぎゃああああ」

そして数分後

咲「妹様」

フ「お姉様元気？」

咲「夫とラブラブです」

咲「そちらの男は」

フ「一だよ」

咲「あの時の外来人ですか」

「今は妖怪になってる」

咲「着いてきて下さい」

そしてレミリアの部屋

咲「妹様を連れてまいりました」

レ「入って」

「東」

昇「お前は」

レ「一だったの」

フ「知り合い？」

「お前と出会う前に知り合った」

その時外に強い妖力を感じた。誰だろうか

レ「この妖力はお母様？」

そして部屋に女性が二人入って来た。一人は吸血鬼で髪は金髪のセミロングだったそしてもう一人は以前助けたセレナだった。

「セレナ？」

セ「あ、貴方は」

？「セレナ知ってるの」

「フラン、こいつは」

フ「お母さんのフランソワーズ」

フラ「レミリア、フランクスじぶり」

昇「お母さんか」

レ「ええ」

フラ「彼は誰」

レ「夫」

フ「同じく」

昇「昇です」

「山崎一です」

式神も出した

「こっちは式神の「ノワール」と「黒炎」」

フラ「ノワール」

フランソワーズは彼を見て驚いた」

ノ「フランソワーズ様」

「え、知ってたのか」

ノ「生前彼女の執事をしてましたから」

じゃあ偶然彼の魂が入りこんだのか。

フラ「二人とも相手が居るのね」

その後俺たちは帰った。彼女は何日かいるみたいだ。ノワールは置いて来た。

その夜俺は舞に襲われた（性的な意味で）

第16話（前書き）

途中エロ注意

「レミリアは俺の嫁」と言う方は閲覧注意

第16話

昔レミリアの母フランソワーズと夫のクラウド二人の執事ノワールと封印される前のルーミアその他大勢の妖怪が壊滅させた人外撲滅を目指した組織「白い夜」が再び動き出した。そして日本の全国陰陽師連合の連絡を受け来日した。

安倍は結界を破ることに成功した。現在白い夜のメンバー7人と神社に居た。他の人は別の場所で待機していた。

安「此処から入れます」

ヨ「それじゃあやってくれ」 日本語が話せるメンバーのヨセフそして神社の中へ入った。出た場所は幻想郷の何処かにある森だった。

ヨ「此処が人外の住まう場所か」

安「では残りの人を連れてきます」

そして残り5人を連れて来た。

ヨ「此処からはお前の指図は受けない」

安「そうですね」

八雲紫は結界の破られた所を修復していた。

紫「誰か入ったみたいね結界を出れなく調整しないと」

その後力の差を痛感した邦明達は幻想郷を去って行った。

白い夜のメンバー12人は紅魔館へ着いた。

彼らの名前はヨセフ、オーギウス、ニクス、ヘイル、ゲイル、シュバルツ、ガイル、マルチェス、レーゲン、アレス、ヨハン、フェレストで彼らは孤児だった。

そしてオーギウスは「過程を省略する程度の能力」ゲイルは「速さを操る程度の能力」を持ち相手の攻撃や能力などを無効化する領域

を持っていた。全員人工的に驚異的な身体能力を持った。

美「貴方達何者ですか」

ゲ「いくぜ」

彼は一瞬で彼女の胸を退魔の剣で刺した。

美「ぐほ」

その時彼女が寝てないか見に咲夜が来た。

咲「一体何が」

オ「行くぞ」

彼は能力で彼女を気絶させて紅魔館へと入って行った。

そして全員別々に行動した。

ノワールはニクス、ヨハン、フェレストに遭遇した。

ノ「侵入者か」

二「やるか」

剣を抜いて襲いかかったが一瞬で弾かれた。そして全員胸を刺され倒れた。

セレナはヨセフ、ヘイル、レーゲンに出会った。

セ「侵入者？」

ヨ「やるか」

そして彼は彼女に斬りかかった。しかし剣は彼女にへし折られ殴り飛ばされた。

ヘイルは逃げようとしたが前に高速へ回られ凄い勢いで蹴られた。

レーゲンはすぐ殴り飛ばされた。彼女は気絶している彼らを持ってきた鎖で縛っておいた。

シュバルツ、ガイル、オーギウスは地下の図書館に居た。

フランソワーズは図書館にいた。

パ「誰、侵入者？」

オ「510年ぶりですフランソワーズ・スカーレット」
フ「まさか」

オ「そうです私は白い夜の創設者の生まれ変わりですから」

そしてかつて彼が使った最高の退魔の剣を抜いた。

フ「まだ残ってたの」

オ「では行きます」

その時彼女の右腕が斬れた。

フ「あの能力も受け継いでる」

すぐ再生してレミリアのグングニルの倍近くある紫の槍を出した。

彼はすぐ彼女の心臓辺りを刺そうとしたしかしすぐ後ろに移動して彼の胸を貫いた。

しかし彼はすぐ能力で傷を治した。

フ「厄介ねアレ使うか」

そして紫の巨大な十字架が現れ彼を磔にした。

オ「能力で省略が出来ない」

フ「それは能力を無効化させるから何をしても無駄」

そして彼に槍を投げてそこに結界を張った。槍が突き刺さると魔法陣が数百個出て爆発した。結界に罅が入った。煙が消えると中には何も残っていなかった。

シュバルツとガイルは銀の銃弾が入ったマシンガンで彼女を撃った。しかし効果無しだった。しかも全ての弾が彼女の前で静止していた。フ「無駄よ」

そしてそれを撃ち返して彼らに当てた。彼らは死んだ。

同じ時刻にゲイルはレミリアの部屋で戦おうとしていた。一緒に来たマルチェスとアレスは何もせず見ていた。

レ「吸血鬼より速いなんて」

昇はレミリアの誕生日なのでプレゼントを買いに外の世界行っていた。

昇「これにしよう」

彼が買ったのは赤い宝石が付いた金の指輪だった。
そして彼は幻想郷へ帰った。

レミリアは槍を投げたがことごとくかわされていた。そして1つが命中したが弾かれた。

レ「え」

ゲ「俺に傷は付けられない」

彼は部屋全体に領域を広げた。レミリアは吸血鬼の力を無効化させられたので彼らより弱くなってしまった。そして彼女を投げ飛ばした
レ「力が出ない」

ゲ「死ぬ前に俺を楽しませてくれるよな、お前ら押さえておけ、後でやらせてやる」

マ「分かったよ」

ア「はいはい」

レ「は、離しなさい」

ゲ「まずは上から」

そして彼は上の服を脱がした。

レ「嫌あ変態」

ゲ「それは行っても逆効果だ」

レ「止めて」

そしてレミリアのスカートの中に手を入れピンクの下着に手を入れた。

ゲ「体は正直だ」

レ「ああ」

そして脱がしスカートを捲って自分のズボンと下着をずらし硬くなつた一物を出した。

レ「止めて離して嫌ああ」

そして彼女の頬に当てた。

レ「あ、ああ」

そして口へ持つて行った。

ゲ「ほら舐めろ」

レ「い、嫌あ」

しかしアレスに頭を持たれ一物を近づけられた。そして唇が当たった。その時白く濁った液体が飛びだした。そして彼女の体にかかった。

レ「きゃあああああ」

ゲ「本番だ」

レ「止めて気持ち悪い」

ゲ「化け物のくせに生意気なんだよ！」

その時彼の態度が一変した。そしてズボンを上げてベルトを締めてから彼女を足で蹴った。

そして背中を何度も踏みつけた。そして足を踏み碎いた。

レ「うわああ」

ゲ「ははは」

そして腕も同じように踏み碎かれた。

レ「（昇早く帰って来て）」

その後屋上まで引きずられ屋上に連れて行き日光を当てた皮膚は一気に焼け爛れた。

レ「止めて熱い！」

そして日光を当てては遮る事を繰り返した。

その頃昇は彼女を探して屋上へ向かっていた。

昇「どこ行っただんだ」

そして昇が屋上へ来た。

昇「レm・・・」

その時昇から黒い妖気が出て出した羽も黒い妖気を纏って剣も黒く染まっていた。

ゲ「何だお前」

昇「覚悟出来たかアハハハハハハ」

そして彼が張っている領域を手で引き裂き彼に歩いて行った。彼は発砲したが全て弾かれた。そして銃を持っていた左腕の肘の先から引き千切ったそして殴り飛ばしてマルチェスとアレスを切り刻みゲイルに歩み寄った。

ゲ「腕がああ」

彼は逃げようと能力で速さを弄ったがすぐに追いつかれて背中を手で挟まれた。そして首を斬られ死亡した。

昇「レミリア」

レ「の、ぼ、る」

彼は彼女を抱いて中へ入って行った。

外伝 佐藤の幻想入り 1

山崎が行方不明になって3週間後ベッドに寝転ぼうとしたらいきなり空間が裂けて俺は落ちて行っただ。そこで意識が途切れた。

少年気絶中・・・

目が覚めると和室で俺は高そうな布団で寝ていて近くには髪が桃色で胸が若干大きな女性が居た。

「ん？（こいつは西行寺幽々子？）」

幽「あ、起きた」

彼女は確か架空の人物なので夢だと思った。

「夢か」

そして俺は再び目を閉じた。

幽「夢じゃないわよ起きて」

彼女に布団から引きずり出された。そして抱きしめて来たいきなり何しやがる胸が・・・

「分かったから」

幽「貴方外来人かしら」

「多分そうだ」

しかしよく見ると綺麗だ。その時彼女の隣の空間が裂け金髪で変わった帽子を被った美女が出て来た。

紫「始めまして八雲紫です」

すげえ本物だ。彼女が俺を幻想入りさせたのか。

「佐藤涉です」

紫「はいこれ」

彼女は別の裂け目から俺の黒楼剣（一に折られた後修復した）が出て来た。

幽「それをどこで（渉？聞いたことあるような）」

幽々子は驚いた顔で聞いて来た。知ってるのか？

「先祖代々受け継がれてきた家宝だけど」

幽「そう（何か会ったことある気がする）」

その時緑の服を着た少女が入って来た。周りに半透明の物体が浮遊していた。

妖「ご飯出来ましたよ目が覚めたんですか」

「佐藤渉だ（妖夢か）」

そして食後俺は妖夢の手伝いをした。

そして居間

幽「涉此処に住んでいいわよ」

「いいのか」

そして風呂に入る事になった。

しばらく浸かっていると扉が開きタオルを巻いた幽々子が湯船に入ってきた。これ何てエロゲ？

「イキナリナンドスカー」

幽「一緒に入りましょ」

そして密着してきた。

「（幽々子とお風呂って俺幸せだ）」

足がギリギリだったので下が大変なことになった。

幽「ふふっ嬉しいのかしら」

「出会ってすぐの奴に何してんだ」

幽「貴方と居ると安心するのよ」

その後浸かるだけで終わった。

その夜夢を見た。それは俺が大きな桜の前で自分を突き刺している

ところだった服装は和服で妖夢と同じような物が浮いていた。そこで夢は終わった。目が覚めると目の前に幽々子の顔があった。しかも俺に抱きついていた。俺の右腕は彼女の着ている浴衣のはだけた胸元に入っていた。

「（何じゃこりやああああ）」

幽「あら起きたの顔が赤いわよ」

「どうして此处に居るんだよお」

幽「昨日貴方の布団に侵入したのよ、さっきからどこ触ってるの」

俺はすぐ手をどけたしかし柔らかい

幽「何か失礼なこと考えた」

こいつ俺の考えを読みあがった。

1時間後皿洗いを手伝っていた。

その頃幽々子は倉庫で資料を見ていた。そして何かを見つけた。

幽「私の名前が書いてある」

それは彼女が生前書いた日記だったそれを見て生前のことを思い出した。

幽「彼と会ってたの私」

その頃俺は付近を散策していた。そして廃墟状態の一階建ての和風の小さな家があった。興味本位で入ってみた。

「うわ酷いなコレ」

中の様子は床が抜け落ち畳は苔が生え屋上も大穴があいていて家具も茸が生えていて何年経ったか分からなかった。そして手帳を見つけた。何故か少しボロいだけだった。そして読んでみた。

どうやら日記らしい。しばらく見ていると頭が痛くなったそして何かを思い出した。

外伝 佐藤の幻想入り 2

昔俺は白玉楼の近くに住んでいた。種族は妖夢と同じ半人半霊だった。名前は桜花渉という名前だったらしい。

そして昔の俺は死ぬ前の幽々子と友人だった。彼女は死に誘う能力があるらしく周りの人が近づけないらしいが俺はその時「打ち消す程度の能力」を持っていたので普通に会って話が出来た。

そして彼女の屋敷

彼女はもう一人の友人を紹介した。

幽「友達紹介するよ出てきて紫」

そういうと空間が裂けて紫が出て来た。

紫「始めまして八雲紫です」

「桜花渉と言います」

そして数日後に祭りへ行く約束をした。

2日後俺は彼女を迎えに行った。

門には妖夢の祖父妖忌が居た。

妖「幽々子様が楽しみにして待っています」

「そうか」

彼女の部屋には誰も居なかったしかし「さよなら渉今まで楽しかった」と書かれた紙が置いてあつて数行下には「貴方が好きです 西行寺幽々子」と書いてあった。

そして彼女を探しに行く途中部屋で誰かの会話が聞えた。

男「都合がいいことに自分から死んだか」

男2「妖怪と仲良くしてるなんて知られたら大変ですからね」

男3「これで西行寺家は我々小野寺家の物になりましたか」

男「庭師はクビにしておけ」

それを聞いて怒った俺は愛刀の黒楼剣を抜いた。そして障子を貫いて前に居た男を殺して障子を倒して。部屋に入った。

男「お前らやれ」

すると7人の刀を持った男が来た。

「この人で無しがあああ」

そして斬りかかる男を次々と斬り三人の前に来て怯える顔を見て笑いながら切り刻んだ。

「ヒヒヒ」

「ぎゃああああ」

そして部屋は血の海になった。

その後庭へ出ると春でも無いのに桜が満開でその下に胸を短刀で刺して死んでいる幽々子が居た。

俺は木の下に行った。彼女は冷たくなっていた。そして冷たい唇にキスした後

「お前が居ないなんて耐えられない」

そして俺は黒楼剣で胸を貫いて死んだ。

その後俺の能力で桜の力が弱くなっていた。そして紫が来て彼女の体を使って封印して俺の死体は力を押さえる為に近くに埋められた。黒楼剣は紫が回収していたが行方不明になっていろんな人を転々として俺の先祖の物になったらしい。

それが思い出した記憶だった。

その時紫が現れた。

紫「思い出したの」

「ああ全て」

紫「あの後片付けたの私よ」

その頃西行妖が中から封印を解こうとしていた。

その後俺は白玉楼へ紫と一緒にスキマで帰った。
そして桜を見に行くとはぼ満開になっていて昔と同じような事になっていた。

紫「昔より強くなってる」

俺は止めに行くことにした。これまでろくな事をしてこなかったの
で俺は決意した。

「俺行くよ」

紫「何言ってるの貴方死にたいの」

刀に宿る前の俺の意思が思い出した時彼に宿ったので白い物体が
出て来た。

紫「貴方半人半霊になったようね」

「俺は行くからどけ」

紫「もういいわ勝手にして、これ持って行きなさい」
渡したのは一枚の白い紙切れだった。

「これは」

紫「白紙のスペルカードよ本当に必要な時使いなさい」

「分かった」

その後幽々子が来た。

幽「涉行くの」

「ああ」

幽「絶対に帰って来て」

「分かった絶対に帰ってくる」

そして俺は桜の下にあいた空間の裂け目に入って行った。

中は白い空間が広がっていた。その時桜の花びらが俺そっくりにな
った。

？「我は西行妖邪魔者を排除する」

そして刀を出して飛びこんで来た。

俺はすぐにかわしてから創ったナイフを投げたしかし全部刀で弾かれた。

その時昔の俺が現れた。そして彼の腕を斬った。血ではなく桜の花びらだった。

「お前」

桜「俺はもう残りカスだから時間がない手伝ってやる」

西「邪魔がはいったか」

そして斬られた腕を元に戻した。

「行くぞ」

ガキン

刀がぶつかった後ろから昔の俺が脇腹を刺したしかし手で掴み引き抜いた。その隙に俺はナイフを投げた。そして前の俺が刀を弾いた。しかしすぐ刀を創り出した。何だこのチート野郎。

その時白紙のスペルカードが光り出した。俺何もしてないよな。

カードには「開花「桜楼剣」」と書いてあった。使ってみると黒楼剣の刀身が桜みたいな色になった。

その隙に前の俺が奴を羽交い絞めにした。

桜「俺に構わず早くこいつをやれ」

西「離せ」

「え」

桜「いいからやれ」

「すまん俺」

そして彼の胸に突き刺した。すると彼の顔色が悪くなった。

西「おのれ、だがこの空間は後1分半で消滅するそれまで足掻くがよいフハハハハ」

そして花びらになって散った。

そして数日後幽々子は散った桜の下に立っていた。

幽「絶対帰って来る」って約束したじゃない」

そして木を叩いてそう言った。

外伝 佐藤の幻想入り 3

決着をつけた直後

「どうしよう出れない」

渉昔「俺の力を全てやる」

昔の俺は死にかけだった。そして光になって俺に入り込んだ。そして一枚の紙が現れた。紙には「希望の紅き刃」と書いてあり早速使った刀が赤く輝いたそしてこの空間の壁に突きたてたと罅が入った何度も斬るとついに壁が割れて目の前が明るくなった。同時に1分半過ぎたのでギリギリだった。

そして気が付くと何処かの森で近くに行方不明になっていた山崎一が居た。

「起きたか佐藤それと人間卒業おめでとう」

よく見ると背中に赤い羽根が生えていた。

渉「俺は確か白玉楼に居た筈」

「じゃあ送ってやるよ」

そして彼は俺のすぐ下にスキマを開いた。こいつも使えるのか。

渉「何でお前が使える」

そしてしばらくしてスキマから出て来た。場所はその桜の近くだった。俺の種族は幽々子と同じ亡霊になっていた。何故だろうか。

木の下には彼女が居た。

幽「絶対帰って来る」って約束したじゃない」

俺は後ろから声をかけた。

「大丈夫、俺はちゃんと帰って来た」

彼女は振り向いた。目から涙が流れた。

幽「帰って来たの」

そして抱きついて来た。

「（え、これ何て二次創作の主人公？）」

幽「良かった本当に」

「とにかく帰ろう」

そして屋敷の中に入った。入ってすぐ妖夢に会った。

妖「戻って来たんですか」

そして夕食後の風呂

「ふういい湯だ」

その時ガラツと扉の開く音がした。また来たか？

幽「一緒に入っいいい」

「また来たああ」

そして浴槽へ入って来た。

幽「背中洗ってあげる」

そして背中を洗って貰っているが胸が結構当たっていて下が大変なことになっていた。

「（ばれたらどうしようか）」

そして何とかばれずに済んだ。

その後俺は布団の中で寝ていたそして夜中目を覚ますと腹の上に幽々子が乗っていた。

「ドーシテコウナッター」

幽「愛してるわフフフ」

「うわ何をする止めrくあせdrftgyふじこーp」

そして俺は幽々子に性的な意味で食べられた。

外伝 佐藤の幻想入り 終

お父さん、お母さん元気ですか俺は童貞卒業と人間卒業しました。

起きると俺は下半身裸で幽々子は全裸で寝ていた。

「そう言えば昨日うわああああ」

幽「おはよう渉」

彼女は起きるといきなりキスしてきた。しかも舌まで入れて来た。

妖「朝ご飯出来m・・・ごゆっくり」

妖夢が来たがすぐ出て行った。

そして数分後服を着て朝食を食べた。

幽「はい、あーん」

「止めて下さい恥ずかしいです」

妖「喋り方変ですよ」

そして夜博麗神社で宴会が開かれたので行くことになった。

神社には沢山の人々が居た。

そして金髪の少女、霧雨魔理沙が俺を見て近づいて来た。

魔「幽々子、そいつは誰だ」

「佐藤渉」

そして天狗の射命丸が来た。

射「見たことない顔ですね取材させて貰いm幽「邪魔しないでくれる」」

取材しようとしたが、幽々子がとてもいい笑顔（目が笑っていない）でそう言うのと逃げて行った。

幽「飲みましょ」

そして次の朝

沢山の人が酔いつぶれて倒れていた。

「気分悪いな」

俺は二日酔いだったが昔の俺の「打ち消す程度の能力」を手に入れた為すぐ治った。

そして酔いつぶれていた二人を担ぎ帰った。

その後起きた幽々子に押し倒された。

外伝 佐藤の幻想入り 終（後書き）

東京都青少年健全育成条例改正案について

<http://gigazine.net/news/20100>

<http://hijituzainet/seisyounen/319>

<http://mitb.mangalog.com/>

第17話（前書き）

「萃香は俺の嫁」と言う方は閲覧注意

第17話

人里では妖怪に恨みを持つ者が集まっていた。そして妖怪を滅ぼすという無謀で愚かな目標を掲げた。

そして最初の標的は鬼の伊吹萃香であった。彼らは鬼の苦手な煎り豆を用意していた。そして「封じる程度の能力」を持つ者が彼女の力を封印してレイプして袋叩きにして人里に晒すという予定だった。

そして彼女が一人の時を見計らって豆を投げ付ける係の5人が一斉に豆を投げた。彼女はしばらく動けなくなったそして能力で彼女の力を封じた。

萃「うわ、お前ら何だ」

そして彼女は押さえつけられた。そして数時間後

萃「もう止めてくれ」

彼女は犯され続けて心がズタズタになった。

そして全員にリンチされた。脚は踏まれまくって変な方向に曲がっていた。そして顔の右半分は醜く腫れていた。瓢箪は踏み砕かれた。そして最後にリーダーの横山に「炎を司る程度の能力」で体中に火傷を負った。そして人里の入り口付近に磔にした。

翌日そこへ人々が集まった。

男「何だ妖怪じゃないか」

慧「鬼じゃないか」

妹「まだ生きてる」

萃「――」

そして自警団が回収した。しかし横山が仕切っていたので近くの洞窟に捨てられた。

そしてその洞窟は変な声が聞えると噂になった。それを聞いた元鬼

神の陽炎は洞窟へ入った。

陽「これは酷いな一体誰が」

彼が食べ物をやると飛び付いた。

萃「――」

腕の鎖を見て昔から好きだった萃香と確信した。

陽「萃香か」

彼女は首を縦に振った。

陽「しかしどうしてこうなった」

萃「――」

陽「治すか」

そして彼は自分の能力の一つ「復元する程度の能力」で襲われる前の状態に復元した。

萃「はあはあ」

陽「大丈夫か」

萃「嫌ああああ」

そして彼女は気を失った。服はボロボロだったので2つ目の能力「創造する程度の能力」で浴衣を作って着せた。

陽「精神も危ないな」

そして妖怪の山の麓の自分の家に持って行った。

陽「やった奴は血祭りにするか」

そう言いながら夕飯を作った。

そして彼女を起こした。

「おい起きろ」

萃「ん、陽炎？」

「とにかく飯にしよう」

食後、彼女を風呂へ入れた。

彼は部屋で待っていた。

その頃横山達は妖怪の山へ攻め入った。

そして彼の家の前を通る時話してしていた。そして彼は彼らの会話

を聞いた。

陽「（誰かいるのか）」

男「あの鬼最高だったな」

男2「もう死んでるんじゃないか」

男3「ハハハ鬼があんな簡単にやれるなんてな」

陽「（萃香の事か）」

そして外へ出て薙刀「胡蝶之舞」を取り出した。

陽「お前らか」

そして猛スピードで彼らに襲いかかった。

男「全員分かれる」

彼らは別々に逃げて行った。殺したのは5人だった。

陽「畜生！、逃げられた」

ドンッ

彼は地面を思い切り踏んだ。そして震度3ぐらいの地震になった。

そして彼は彼らを追いかけて行った。

その後合流した彼らは白狼天狗と戦闘になった。横山が炎で灰にして全滅させた。

そして山火事が起きた。射命丸は写真を撮っていた。一は燃えてるのを見て燃えてる所を巨大な壁で囲った。

「何じゃこりゃあ」

そして彼は大量の水を落とした。そして鎮火した。

舞「一体誰が」

そして彼らは山を登って行った。途中で大天狗達に見つかり再び戦闘になり半数が捕まったり死んだりした。そして生き残った奴らが天魔の家を襲撃した。

「ん、外が騒がしい」

外に出ると槍や矢や刀を持った人々が居た。

「人間か」

横「行くぞ」

そして一気に押し寄せて来た。俺は式神の黒炎を使ってみた。口から黒い炎を吐いた。浴びた奴は灰になった。しかし家が燃えそうなので止めた。

後ろからフランがレーヴァティンを使った。

男「ひ、ひい」

そして天狗の大群に囲まれた。そしてほとんどが捕まった。しかし横山と能力者の山田が抵抗した。

横「逃げるか」

そして彼らは闇に消えた。

「あ、待て」

その時一人の角を生やした男が来た。殆どの奴が殺気に当てられ気絶した。そして彼らを切り刻んだ。

陽「ふう帰るか」

彼は飛んで行った。捕まった人々は人里へ引き渡された。

そして家

陽「（今度こそ告白するか）」

そして彼は告白した。

陽「萃香」

萃「あ、お帰り」

陽「昔から好きだった」

そして抱きしめた。彼女は顔を赤くした。

萃「！」

そしてキスした。

萃「私も昔から好きだった、まさかそっちから言ってくるとはね」

陽「それは良かった」

その頃一人で風呂に入っていた。その時背中に柔らかい何かを感じた。そして振り向くとこの前会ったルーミアが居た。しかもタ

オルを巻いた状態で

「えええええ」

ル「そんな驚かなくてもいいじゃない」

「どうやって入って来た」

ル「ずっと貴方の影に隠れてたのよ」

これから俺はどうなってしまうのだろうか。

登場人物・設定2

ノワール

種族 不明

年齢 享年599歳

能力 無し

説明 昔フランスワーズの執事をしていたが白い夜との戦いで死亡する。しかしーが式神を作った時に偶然魂が入りこんだ。

フランスワーズ・スカーレット

種族 始祖吸血鬼

年齢 消されました

能力 想像した物を創り出す程度の能力
無形物も作れる。

説明 レミリアとフランドールの母で夫はクラウド。

佐藤渉

種族 人間 半人半霊 亡霊

能力 刀剣類を創造する程度の能力

打ち消す程度の能力

昔の涉から受け取った。能力の干渉などを打ち消せる。

説明 ある日幻想入りして白玉楼で住むことになった。彼の前世は幽々子の友人であつたが彼女が自害

した直後後を追ひ自殺した。封印が解けた西行妖を倒した。

安倍邦明

種族 人間

年齢 32歳

能力 操る程度の能力

説明 安倍清明の子孫で陰陽師を仕事の側らでやっている。幻想郷の存在を知り結界に穴を開け侵入した。力の差を痛感し外へ帰った。

陽炎

種族 鬼（鬼神）

年齢 不明

能力 復元する程度の能力

壊れた物や怪我を元通りに出来る。

創造する程度の能力
能力など何でも創れる。

説明 かつて鬼が妖怪の山に居た頃鬼神だった。鬼が地底へ消えた
後行方不明だったが数年

前に幻想郷へ帰って来た。横山らに襲われ洞窟に捨てられた
萃香を見つげ助けた。

黒楼剣

涉の前世桜花涉が持っていた刀身が黒い刀。西行妖の暴走を止める
時に桜楼剣へと変貌した。

白い夜

かつてフランソワーズらが壊滅させた組織。しかし生き残りがいて
ひっそりと復活していた。その中の15名が幻想郷へ吸血鬼を殺し
に行くが全滅した。

胡蝶之舞

陽炎が使う薙刀で刀身が真っ黒。

第18話

ル「ねえ、背中洗って」

「（これ以上増えたらどうなる）」

そして背中を洗う事になった。

「何で俺が」

そして洗っていたが白くて綺麗な背中だ。

ル「次は私が洗ってあげる」

そして背中を現れたが胸が当たっていた

「（^ ^）」

ル「ふふふ」

そして再び浴槽に入った。

「早く帰ってくれ」

ル「え、何て」

「だから早く帰ってル「何て」」

「だる「え、何て」」

「d「何て」」

帰れと言ったが無視された。そして俺の影に消えた。

「はあやつと一人になった」

そして上がった。

フ「遅かったね（あれ作者、最近出番少ないんだけどドウシテカナ）」

「

作者「ギヤアアアスミマセン」

あれ、誰かいた気がするな。気のせいかな。

そして夜中

下半身が重かったので布団を捲ってみるとルーミアが乗っていた。

「ゑ？」

ル「最近欲求不満だから相手して」

そしてそのまま闇に縛られ押し倒された。

「＼（＾ｏ＾）／」

次の日の早朝

「ん？」

ル「zzzz」

ルーミアが俺の上で寝ていた。息苦しい。

フ「ねえ誰その人」

舞「今からOHANASIですね」

最悪な事に二人が起きた。そして朝から二人に襲われた（性的な意味で）

「ギャアアア」

数時間後

「朝からはきつい」

フ「一が悪いんですよ」

ル「ん」

ルーミアが起きた。

舞「貴方は何ですか」

ル「彼が欲しくなった」

「これ以上増えたら駄目だああ」

舞「でも賑やかな方がいいですから許しましょう」

フ「次は無いよアハハハ」

「ハイ、ワカリマシタ」

そしてまた一人増えた。

その頃紅魔館

寝室

昇「レミリア離せ」

レ「zzzzz」

レミリアが抱きついていて起きられなかった。彼女にキスすると目を覚ました。

レ「！（ん）」
昇「やっと起きた」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3279x/>

東方小説 もう1つの世界

2011年10月31日19時30分発行